

向精神薬の新しい命名法(Neuroscience-based Nomenclature)のご紹介

内田 裕之^{1,2)}

1) 慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室

2) Neuroscience-based Nomenclature Taskforce, Asian College of Neuropsychopharmacology

現在の向精神薬の命名法 (Nomenclature) は、1950 年代初頭にはじまりましたが、適応疾患に基づき命名するこの分類法は、最新の科学的知見を必ずしも反映しているわけではありません。例えば、“抗精神病薬”はかつて統合失調症に対して主に使用されていましたが、現在は統合失調症に限らず双極性障害、うつ病にも使用されます。また、“抗精神病薬”の中にも様々な機序を持つ薬剤が含まれます。こうした事態は、“気分安定薬”や“抗うつ薬”においても同様です。このような従来の向精神薬の命名法は、医療従事者だけではなく、患者の混乱も招きかねません。

そこで、欧州神経精神薬理学会 (ECNP) が中心となり、アジア神経精神薬理学会 (AsCNP)、米国神経精神薬理学会 (ACNP)、国際神経精神薬理学会 (CINP)、国際基礎臨床薬理連合 (IUPHAR) と共同して、現在の科学的知見を反映させた新しい多軸命名法 “Neuroscience-based Nomenclature (NbN)” を提唱しています。この命名法は次の 4 次元(dimension)を有する；“クラス” (現在の知識と理解を反映)；“適応疾患” (主要な規制当局による適応疾患)；“有効性と副作用” (治験データに基づく)；“薬理学” (神経画像、動物、基礎研究の知見を含む)。

NbN の最新版は、本プロジェクトのウェブサイト¹⁾で無料で入手できます (<http://nbnomenclature.org/>)。また日本語版は本アプリをダウンロードし、使用言語の設定で日本語を選択すれば、使用可能です。

この命名法が定着するか否かは未知数かもしれませんが、疾患の病態生理や薬剤の作用機序が不明瞭なことの多い精神科領域で、現在の命名法がもはや妥当とは言えない以上、この試みは非常に有意義と言えるでしょう。すでに複数の雑誌で、NbN に基づく記載を要請する項目を投稿規定に取り込む動きが見られます (例：Eur Neuropsychopharm, Int J Neuropsychopharm)。今後も随時、動向をご報告いたします。